

## 星と乙女：文苑

著者	夢園
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 7
ページ	9 5 - 9 6
発行年	1900-02-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5495">http://hdl.handle.net/2298/5495</a>

あはれ、初春の彩は喜びの色なり。初春の歌は希望の歌なり。人これを見て色笑まざるものなく、これを聞きて心昂らざるものなし。たのしき哉。

## 星と乙女

夢園

夕風やみて星出でぬ、  
あれし海さへ和どりきぬ  
平和の神のえろえりす  
夕の國は来るなり  
勞れ戦ひ、わづらひの  
苦えみもいま忘れられて、

\* \* \*  
漁火の影三ツ二ツ

沖の浪間にまゝたくは  
かしづく夜のあるならん  
はぐゝむ妻子のあるならん  
今かかへるとまづらんを

さい波よする磯の邊に  
星の光に照らされて

立てる海士屋の窓暗く  
さすや光は二分心の  
心細くは見ゆれども  
浮世のあらえはふきも來ず

\* \* \* \*

漁士が娘か只二人  
姉と妹かむつまじく  
ひるのつかれを語りあひ  
えましげに見る其のまみに  
みそらの星は仰がれつ  
あゝなづかえき新星の  
影に二人は磯づたひ  
たどるどしもはあらねども  
いつぞか來ぬる丘の上

杉の木立の奥ふかく

いのるか村祠のみやしるに

日毎あざりに出船の

わが父の君兄の君

恙あるなのまごころを

包むにをとき四の袖

見るもやさき海士乙女

み空の星の下り來て

花の乙女となりたるか

乙女や空に舞ひのぼり

夕けむり

橘木暮色

人里遠き此深山

夕をつげてなりわたる

鐘の響もかすかにて

家路をたどるやまかづの

影だにさらにみえぬなり

照る星くづと身を變へし

天の河邊の「三ツ星」

『姉妹星』の影若く

\* \* \* \*

海士か軒端を照らすとき

さす夕汐に帆手うちて

父は歸りぬ兄ともに

苦屋にちかくなりぬれば

唄ふ舟歌聲もすみ

梨

雨

峯又峯をそめなせる

夕の光うつろひて

のどよぶ聲に鳴く鶉の

しづけき谷をわたりては

なほまたさびき暮の色